

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008 ～ 2010

課題番号：20530588

研究課題名（和文） 小学生用主要 5 因子性格検査の全国標準化

研究課題名（英文） The standardization of the Little Big Five Personality Inventory

研究代表者 村上 宣寛

(MURAKAMI YOSHIHIRO)

富山大学人間発達科学部教授

研究者番号：50115151

研究成果の概要（和文）：小学生用主要 5 因子性格検査を全面的に改定し、1674 名で全国標準化を行った。質問紙は 51 項目で構成された。ビッグ・ファイブは 40 項目で、それに問題攻撃性尺度を追加した。信頼性係数は 0.68 から 0.81、保護者の評定と子供の自己評定の相関は 0.39 から 0.56 であった。

研究成果の概要（英文）：The little big five personality inventory for children was completely revised and standardized by the 1674 pupils. The questionnaire was composed by 51 items: 40 items for big five scale, and the problem aggressiveness scale were added. The coefficients of reliability were ranged from 0.68 to 0.81, and the coefficients of validity were ranged from 0.39 to 0.56, according to the correlations between parent's rating and children's response.

交付決定額

(金額単位：円)

|         | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|---------|-----------|---------|-----------|
| 2008 年度 | 1,600,000 | 480,000 | 2,080,000 |
| 2009 年度 | 600,000   | 180,000 | 780,000   |
| 2010 年度 | 600,000   | 180,000 | 780,000   |
| 年度      |           |         |           |
| 年度      |           |         |           |
| 総計      | 2,800,000 | 840,000 | 3,640,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：ビッグ・ファイブ、小学生、標準化

## 1. 研究開始当初の背景

現在、基本的な性格の次元は、外向性(E)、協調性(A)、良識性(C)、情緒安定性(N)、知的好奇心(O) の 5 つであるという仮説があります。アメリカを始め、世界各国で検証されつつあります。この仮説を 5 因子モデルとかビッグ・ファイブと呼ぶ。

研究者や被験者が違っても、これらの因子が繰り返し現れることが確認されている。ま

た、これらの因子は、数年間にもわたって、頑健で、安定している。これらの因子を組み合わせ、解釈すれば、ほとんどすべての性格が記述できる。

この仮説は性格用語の分類研究から生まれた。性格検査の分析からも支持されている。基礎研究は主として英語圏で行われたが、ドイツ語、中国語、日本語などでも確認された。

1980 年代からゴウルドバーグがノーマンのリストに基づいて精力的に因子分析を繰

り返し、1982年には形容詞339語から100クラスターを抽出、1990年には形容詞133から100クラスター、5因子を抽出、1992年には形容詞100語から5因子を抽出しました。ゴウルドバーグの一連の研究によってビッグ・ファイブ仮説が確認された。

日本でこの仮説に基づき、1997年に村上宣寛と村上千恵子が「主要5因子性格検査」を作成し、広く流布するようになった。ところが、これの検査は中学生以上に適用可能であり、小学生に適用できる妥当性の高い性格検査はなかった。

児童の性格研究は、欧米では担任教師や両親による他者評定が主流で、自己評定の質問紙はあまり用いられていない。ただ、最近では、ビッグ・ファイブの児童用の質問紙が作成されている。

## 2. 研究の目的

小学生用主要5因子性格検査(The Little Big Five Personality Inventory)は、既存の主要5因子性格検査を単に小学生用に書き直すのではなく、ビッグ・ファイブ仮説に基づいて、独自に質問紙を構成することとした。

## 2. 研究の方法

### (1) 質問紙の構成

ゴウルドバーグのチェックリストを基準にして、まず、小学生用主要5因子性格検査の第一版の30項目を精査した。そして、チェックリストに該当する言葉が見当たらなかった場合、その言葉に関係する質問を数項目作成し、1~2項目を新規項目として採用した。最後に現職教員1名が質問項目を読み、小学生4~6年生に難しいと思われる表現等の手直しを行った。

また、2005年に村上と福光が開発した問題攻撃性尺度(Ag)13項目を追加した。問題攻撃性尺度は、信頼性が0.85、担任教師の評定との相関が0.46と高く、現状ではもっとも妥当性の高い攻撃性尺度である。

多人数のデータに基づいて標準化を行うため、専用のA4マークシートを作成し、読み取りプログラムを執筆した。マークシートへの印刷の関係から、質問紙は53項目とした。

質問紙は各学級担任が都合のよい時間帯に実施した。参加者は大学付属小学校の4年生76名(男性38名、女性38名)、5年生75名(男性37名、女性38名)、6年生77名(男性40名、女性37名)で、A4マークシートに印刷された53項目の暫定版質問紙に「はい」と「いいえ」で回答した。また、担任教員は、各児童の性格をゴウルドバーグのチェック

リストで児童を評価した。

まず、全53項目で主因子法による因子抽出を行うと、固有値の減少傾向からはっきりと5因子が確認できた。そこで、因子パーシモン法による直交回転を行った。担任の評定と有意でない項目は因子負荷量も小さかった。そこで、外向性項目で有意でない2項目を削除して、因子分析をやり直した。続いて、良識性を8項目、情緒安定性と協調性と知的好奇心を9項目にして、因子分析をやり直した。その後、試行錯誤的に1項目を削除して、因子分析を繰り返し行った。7回目の因子分析で、綺麗な単純構造が得られたので、これを最終結果とした。

このように、ビッグ・ファイブの性格次元を各8項目で構成し、 $\alpha$ 係数を求めると、それぞれ0.71、0.81、0.78、0.68、0.73となった。予想したように、第一版よりも全体的に少し大きな値であった。これは各2項目ずつ同質の項目数が増えたためである。再検査信頼性係数は調査していないが、6項目での尺度の信頼性係数の平均が0.80で、スピアマン-ブラウンの修正公式で計算すると、8項目では0.84程度が見込まれる。信頼性には問題がないと思われる。

ただ、担任教員の評定と児童の自己評定の相関は全体的に小さく、外向性のみ0.23( $p < .001$ )が得られただけであった。これは担任教員が研究授業等で非常に忙しい付属小学校に勤務していたためと思われる。このために、基準関連的な情報を利用して尺度構成することが出来なかった。

### (2) 全国標準化

小学校の住所をインターネットから100件程度作成し、協力依頼の文書、マークシートを郵送した。しかし、協力小学校は数件にすぎず、予想以上に標準化が困難であった。その後、300件程度の住所録を作成し、協力依頼を行ったところ、11校が研究協力に応じた。内訳は、八戸市立江陽小学校、八戸市立図南小学校、鳥取市立醇風小学校、射水市市立大門小学校、坂井市立雄島小学校、鳥羽市立加茂小学校、蒲郡市立大塚小学校、伊賀市立長田小学校、曾於市立岩南小学校、金沢市立西南部小学校、市川市立信篤小学校であった。

全国の小学校から等確率で抽出されたとは言えないが、標準化のためには十分なデータが収集できたので、調査を打ち切った。

不応答5以上のデータを削除した結果、参加者は、小学4-6年生1674名(男性775名、女性689名、不明210名、平均年齢10.82、標準偏差1.03)となりました。成人用主要5因子性格検査では、男女込みで標準化されているので、最終的には性別不明のデータも含まれた。

### (3) 頻度尺度の作成

選択肢の回答頻度を分析して、「はい」もしくは「いいえ」の選択頻度が30%未満の7項目で、低頻度側の選択肢を選んだ場合に加点する方法で頻度尺度(F)を構成した。

### (4) 基本統計量の計算

男女別と全体で各尺度の平均と標準偏差を求めた。一要因分散分析で性差を分析すると、性差が認められたのは、頻度(F(1, 1462)=5.45\*,  $p < 0.05$ )、問題攻撃性(F(1, 1462) = 33.14\*\*,  $p < 0.01$ )、協調性(F(1, 1462)= 93.81\*\*,  $p < 0.01$ )であった。一要因分散分析を繰り返して適用した関係で、有意性を割り引いて解釈すべきなので、特に大きな性差を見ると、男性では問題攻撃性が高く、女性では協調性が高いといえる。

### (5) 因子構造の再現性

尺度構成は4~6年生228名で行った。しかし、標準化に用いた1674名のデータで、同一の探索的因子分析(主因子法、因子パーシモニー回転)を行うと、項目の因子負荷量が少し変わってしまった。両因子構造の一致係数を求めた。

ビッグ・ファイブの尺度間の一致係数は、外向性0.95、協調性0.93、良識性0.89、情緒安定性0.93、知的好奇心0.95であり、高度に一致していたので、項目の組み替えは行わないことにした。

### (6) 妥当性検証

担任教師による児童の評定は、附属小学校が、研究授業等で多忙であるために、困難である。また、教育現場の負担を考えると、小学校で中間評定を行うことも困難である。しかし、両親に児童の性格を評価させることは、教育現場にはさほどの負担ではなく、実行可能であると考えた。そこで、妥当性検証の方法として、児童の自己記入式のデータと、保護者による児童の評定データとの相関を調べることにした。

児童用はA4版マークシート、保護者用も同様のマークシートで、教示文のみが異なっていた。保護者用の教示文では、実施の目的が妥当性(テストの正しさ)研究であり、「お母さん、もしくはお父さんに、自分のお子さんになったつもりで回答してもらい、その結果と、お子さん自身の回答の一致度を調べる予定」であり、「データは集団として統計処理しますので、個別の回答が表に出ることはありません」と明記した。参加者は大学付属

小学校4~6年生6クラス240名であった。ただ、1クラスでは、回収した保護者用と児童用のマークシートが混ざっていたので、除外した。また、欠損データも除いた。その結果、有効回答数は、小学4~6年生196名(男性99名、女性97名、平均年齢10.29歳、 $\sigma = 0.97$ )であった。

保護者の他者評価と児童の自己評価の相関は、頻度0.21、問題攻撃性0.35、外向性0.56、協調性0.39、良識性0.41、情緒安定性0.35、知的好奇心0.45であった。

バーバーレリらのビッグ・ファイブ性格検査(BFQ-C)の妥当性は、本検査と同様に、母親の他者評定と児童の自己評定の相関で算出されていました。それによると、外向性0.26、協調性0.27、良識性0.02、情緒不安定性0.27、知的好奇心0.52であった。今回、開発した小学生用主要5因子性格検査は、BFQ-Cと比べると、知的好奇心で劣るが、他のすべての尺度の妥当性係数はBFQ-Cを上回っていた。おそらく、世界でもトップクラスの妥当性係数が得られたと思う。

## 4. 研究成果

### (1) ソフトウェア

小学生用主要5因子性格検査システムはフリーソフトとして配布を始めた。動作環境はWindowsが搭載されたパーソナルコンピュータである。

ソフトウェアはコンピュータ方式とマークカード方式をサポートしている。テストの実施後は回答の整理と自動解釈文が出力される。その内容は、フェースシート、プロファイル、自動解釈、尺度得点である。自動解釈文は約100個のプロダクション・ルールにより自動生成される。長さは個人によって異なるが、およそ2000文字前後である。

### (2) 質問紙とマークカード

多人数に一度に実施する場合に利用する。質問紙を各自に与えて、回答用マークカードに回答させると、数百人のデータでも、自動処理が可能である。BigFive専用のマークカードを使用する。カードリーダーはセコニックSR-430である。

### (3) カーボン版

手採点を容易にするために、カーボン方式の質問表を作成した。コンピュータが手元になく、検査結果をすぐ知りたい時に使う。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

村上宣寛 小学生用主要 5 因子性格検査の改良 パーソナリティ研究(審査中)

[学会発表] (計 4 件)

- ① 村上宣寛 小学生用主要 5 因子性格検査の全国標準化(1) 日本パーソナリティ心理学会 2008 年
- ② 村上宣寛 小学生用主要 5 因子性格検査(LittleBigFive2)の項目構成 日本教育心理学会、2009 年
- ③ 村上宣寛 小学生用主要 5 因子性格検査(LittleBigFive2)の標準化 日本心理学会、2010 年
- ④ 村上宣寛 小学生用主要 5 因子性格検査(LittleBigFive2)の妥当性 日本パーソナリティ心理学会、2010 年

[図書] (計 2 件)

- ① 村上宣寛 小学生用主要 5 因子性格検査の手引き 学芸図書、2011 年、45.
- ② 村上宣寛 小学生用主要 5 因子性格検査用紙 2011 年、6.

[その他]

(1)質問項目

- 1 ほかに人とくらべると元気に行動するほうです。
- 2 思いやりがあるほうです。
- 3 どちらかという、さいごまで全力をつくすほうです。
- 4 いつも気になることがあって、落ちつきません。
- 5 たくさんものごとを知っているほうです。
- 6 からかわれたら、たたいたりけったりするかもしれません。
- 7 おこると、くちぎたない言葉を言います。
- 8 元気がよいと人に言われます。
- 9 どちらかという人とにたいしてやさしいほうです。
- 10 むずかしい事にチャレンジします。
- 11 どちらかという、気持ちが落ちつかないことが多いです。
- 12 いろいろなことをたくさん知っています。
- 13 すぐにおこる方です(むかつく方です)。
- 14 たたかれたらたたきかえします。
- 15 わたしはだいたんなほうだと思います。
- 16 だれにでも親切にするようにしています。
- 17 どちらかという、やろうと思ったこと

- が長つづきしないで、こん気がないほうです。
- 18 くよくよと考えこみます。
- 19 いろいろな問題やことがらから同じせいしつを見つけだすのは、ほかの人よりとくいです。
- 20 クラスの中で大切な人です。
- 21 いやなことを言ったあい手には強く言いかえします。
- 22 どちらかという、おとなしいほうです。
- 23 いつも人の立場になって考えるようにしています。
- 24 何かにとりくんでも、とちゅうでやめてしまうことが多いです。
- 25 きんちょうしてイライラすることがよくあります。
- 26 問題をよく考えないで、行動することが多いです。
- 27 友だちの考えにさんせいできないときは、はっきり言います。
- 28 深く考えないですぐに行動するほうです。
- 29 言って良いことと悪いことはよく考えてくべつします。
- 30 どちらかという、あきっぽいほうです。
- 31 ちいさなことまで気になってしまいます。
- 32 問題をいろいろなほうめんから考えるのががてなほうです。
- 33 すぐにけんかをしてしまいます。
- 34 少しこわいことをやってみるほうです。
- 35 けんかをしたあとそのりゆうを考えます。
- 36 いじめられている子を見ると助けてあげたくなる。
- 37 いつも気に入らなくてぶすつとしています。
- 38 ほかに人とくらべると、ものごとの本当のことがみぬけるほうです。
- 39 人にらんぼうなことをしたことがあります。
- 40 ほかに人とくらべると話しずきです。
- 41 人のいうことは信じられないほうです。
- 42 自分から親の手伝いをします。
- 43 あまり考えないでものごとを決めたり、行動しています。
- 44 むずかしい問題にぶつかると、どう考えればよいかわからなくなることが多いです。
- 45 ちょっとしたことではらがたちます(むかつきます)。
- 46 人の前で話すのはにがてです。
- 47 学校のしごとや勉強には、いっしょうけんめいにとりくみます。
- 48 こわいものから逃げたくなります。
- 49 あまり心ばいばかりするほうではありません。
- 50 しゅくだいがあれば終わるまで遊びません。

51 カットするとなかなか気持ちをおちつけることができなくなります。

(2)項目番号と採点方向

頻度(F)

はい 19 25 33 37 41  
 いいえ 36 39

問題攻撃性(Ag)

はい 6 7 12 13 14 21 27 33 39 45 51  
 いいえ 2 20

外向性(E)

はい 1 8 15 28 34 40  
 いいえ 22 46

協調性(A)

はい 2 9 16 23 29 35 47  
 いいえ 41

良識性(C)

はい 3 10 36 42  
 いいえ 17 24 30 48

情緒安定性(N)}¥¥

はい 49  
 いいえ 4 11 18 25 31 37 43

知的好奇心(O)

はい 5 12 19 38 50  
 いいえ 26 32 44

(4)標準得点換算表

| 尺度    | 素点 | 標準得点 |
|-------|----|------|
| ----- |    |      |
|       | 0  | 47   |
| ?     | 1  | 71   |
|       | 2  | 95   |
|       | 3  | 119  |
| ----- |    |      |
|       | 0  | 35   |
|       | 1  | 44   |
|       | 2  | 52   |
| F     | 3  | 61   |
|       | 4  | 69   |
|       | 5  | 78   |
|       | 6  | 86   |
|       | 7  | 95   |
| ----- |    |      |
|       | 0  | 29   |
|       | 1  | 33   |
|       | 2  | 36   |
|       | 3  | 39   |
|       | 4  | 42   |
|       | 5  | 46   |

|       |    |    |
|-------|----|----|
| Ag    | 6  | 49 |
|       | 7  | 52 |
|       | 8  | 55 |
|       | 9  | 58 |
|       | 10 | 62 |
|       | 11 | 65 |
|       | 12 | 68 |
|       | 13 | 71 |
| ----- |    |    |
|       | 0  | 29 |
|       | 1  | 33 |
|       | 2  | 38 |
|       | 3  | 43 |
| E     | 4  | 48 |
|       | 5  | 53 |
|       | 6  | 58 |
|       | 7  | 63 |
|       | 8  | 68 |
| ----- |    |    |
|       | 0  | 27 |
|       | 1  | 32 |
|       | 2  | 36 |
|       | 3  | 41 |
| A     | 4  | 45 |
|       | 5  | 50 |
|       | 6  | 54 |
|       | 7  | 59 |
|       | 8  | 63 |
| ----- |    |    |
|       | 0  | 28 |
|       | 1  | 33 |
|       | 2  | 38 |
|       | 3  | 42 |
| C     | 4  | 47 |
|       | 5  | 52 |
|       | 6  | 57 |
|       | 7  | 61 |
|       | 8  | 66 |
| ----- |    |    |
|       | 0  | 23 |
|       | 1  | 29 |
|       | 2  | 34 |
|       | 3  | 39 |
| N     | 4  | 45 |
|       | 5  | 50 |
|       | 6  | 55 |
|       | 7  | 61 |
|       | 8  | 66 |
| ----- |    |    |
|       | 0  | 36 |
|       | 1  | 40 |
|       | 2  | 45 |
|       | 3  | 50 |
| O     | 4  | 55 |
|       | 5  | 59 |
|       | 6  | 64 |
|       | 7  | 69 |

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村上 宣寛 (MURAKAMI YOSHIHIRO)

富山大学・人間発達科学部・教授

研究者番号：50115151